

聖書日課 『からし種』 2024.10.20-27

<p>10月20日 (日)  エゼキエル 12章</p>	<p>「彼らは見る目を持っていながら見ず、聞く耳を持っていながら聞かない。まことに彼らは反逆の家である」(2節)。私たちの目と耳は見るべきものを「見て」、聴くべきものを「聞く」ことができているか。自分の好き嫌いで目と耳を「閉じて」していないか。主日礼拝は、そんな私たちが命の御言葉に「開かれていく」ための礼拝。今朝も共に教会の礼拝に集おう。</p>
<p>21日 (月)  エゼキエル 13章</p>	<p>「わたしは…お前たち(偽りの預言者)が鳥を捕らえるように捕らえた魂を解き放つ。また、わたしは…わが民をお前たちの手から救い出す」(20-21節)。私たちはまことしやかに語られる言葉に囚われてしまいやすい。フェイクニュースがあふれる昨今、主の言葉を聴き分ける霊性をいただき、私たちを解き放ち、救い出す主の働きにあずかせてください。</p>
<p>22日 (火)  エゼキエル 14章</p>	<p>『お前たちは…慰められ、わたしがそこで行ったすべてのことは、理由なく行ったのではないことを知るようになる』と主なる神は言われる」(23節)。主なる神がなされることは、その時には理解できなくても、あとで必ず「ふさわしい理由」があったことを知らされる。その意味で最終的には神さまがご自身の正義を貫かれることは、私たちにとって大きな慰めである。</p>
<p>23日 (水)  エゼキエル 15章</p>	<p>「わたしが顔を彼らに向けるとき、彼らはわたしが主なる神であることを知るようになる」(7節)。「～のとき、彼らはわたしが神であることを知るようになる」という言葉は、エゼキエル書でなんと40回以上も語られている。神は「さまざまな時」を用いて「主なる神であるわたしを知ってほしい！」と切望されている。たとえ「その時」がわたしには「災い」に思えたとしても！！</p>

聖書日課 『からし種』 2024.10.20-27

<p>24日 (木)</p> <p>エゼキエル 16章</p>	<p>「わたしがお前の傍らを通して、お前が自分の血の中でもがいているのを見たとき、わたしは血まみれのお前に向かって、『生きよ』と言った」(6節)。赤ん坊が血まみれで放置されている描写をどう受けとめたらよいのだろう。今日も世界の至る所で赤ん坊が泣き叫んでいる。「生きよ」と伝えるために来てくださった方の福音を教会が聞き続けることができるように。</p>
<p>25日 (金)</p> <p>エゼキエル 17章</p>	<p>「そのとき…主であるわたしが、高い木を低くし、低い木を高くし、また生き生きとした木を枯らし、枯れた木を茂らせることを知るようになる」(24節)。私たちは命の主なる神に息を吹き入れられて生き、息を取り上げられるとたちまち枯れる者。しかし、からし種のように小さな者が主の息を受ける時、あらゆる鳥が宿る木(23節)に成長させられる希望をいただく。</p>
<p>26日 (土)</p> <p>エゼキエル 18章</p>	<p>「あらゆる背きを投げ捨てて、新しい心と新しい霊を造り出せ。…どうしてお前たちは死んでよいだろうか」(31節)。エルサレム神殿を失った人々はバビロンの地でどのように神を礼拝したらよいのか途方に暮れていた。しかし主は捕囚の地で彼らに寄り添い、その苦難を背負い「生きよ」と呼びかけ続けてくださっていた。その主の声を今日聞かせてください。</p>
<p>27日 (日)</p> <p>エゼキエル 19章</p>	<p>「この歌は悲しみの歌。悲しみの歌としてうたわれた」(14節)。獄中で命尽きる王たち、焼け落ちていく都。かつては自らを神の宝の民(申命7:6)と信じ、他国と戦い領土を奪って建てた国は、その神の「怒り」を受けて他国に滅ぼされてしまった。この事をうたう「悲しみ」の歌。預言者は神の「悲しみ」を託されているからこそ、神の「怒り」を大胆に語れるのだろう。</p>